

南京国民政府初期における国民党上海市党部の宣伝活動

論文要約

1927年4月18日に南京国民政府を樹立した蒋介石は、1928年に北伐による全国統一を達成して訓政時期開始の宣言を発した。この過程において、1927年4月12日の上海クーデターから始まった中国共産党と党内左派の排除を目的とする「清党」は、国民革命時期に入党した多くの党員を中国国民党から離反させ、党勢に大きな打撃を与えた。このため、国民党は組織結束の強化を求め、影響力を社会の基層まで浸透させようとしたが、とりわけ非常に重視されたのが宣伝の役割であった。南京国民政府初期において、国民党中央宣伝部は、対外宣伝や党内統治の強化など様々な役割を担っていたと思われる。そして、国民党政権にとって、中国の経済や輿論の中心であった上海はとりわけ重視すべき都市であり、ほかの都市と比べると租界の存在、輿論の中心や映画産業の発達など独自の特徴が多く存在していた。つまり、社会への影響力の浸透を図る国民党政権にとって、上海は極めて重要な都市であり、上海市党部、とりわけ宣伝部が大きな役割を發揮することに大きな期待をかけていたと考えられる。

上海市党部宣伝部の基本的編成は、指導科・編審科・総務科からなり、市政府の各部門と連携して郵便検査処、査禁反動刊行物委員会や戯曲電影審査委員会など重要な機関を有して、上海市における宣伝工作与統制工作进行を展開した。また、宣伝部は市宣伝部—区党部宣伝部—区分部宣伝委員というヒエラルキーを利用し、宣伝部の工作を社会の基層まで浸透させようとした。そして、上海市党部の宣伝活動の対象は党内宣伝、党外向けの宣伝、思想統制、という三つを中心とした。

まず、国民党党内の派閥闘争に対応して党内の統一を求めするためには、党内宣伝が不可欠であった。上海市党部は宣伝面における指揮命令システムを構築し、訓練部は党務人材訓練班の開催及び党員訓練競争試合の挙行により党への求心力の強化や党員工作能力の向上を促そうとした。また、1929年から改組派の政治的・軍事的脅威の拡大に対し、上海市党部宣伝部は国民党中央の要求に応じて、1929年10月から大規模な反改組派宣伝運動を展開した。改組派反対の宣伝は党部内の党員に対する宣伝をより重視するものであり、集中的に演説試合と講演会を開催することによって上海市党部の各区党部・区分部の党員が広く動員され、党内宣伝の効果を上げることにつながっていたと思われる。

それに対し、党外向けの宣伝は反帝国主義宣伝を中心とし、反日運動、不平等条約廃除運動、租界教育権回収運動に対応する宣伝活動が相次いで展開された。反日宣伝は1927～1928年の日本の2回の山東出兵による反日運動に伴い展開された。その特徴は以下の4点である。①経済絶交が唯一の反日運動の手段であると宣伝すると同時に、その限界も理解していた、②日本研究がより重視されるようになった、③反日運動を国民党政権の統治強化に結びつけた、④反日運動を契機に全面的な反帝国主義運動を推進しようとした。廃約運動の宣伝は、主に1928年6月から南京国民政府の不平等条約廃棄宣言に合わせて展開された。上海市党部は不平等条約に対し「修約」ではなく「廃約」をすべきであることを頻繁に強調し、アメリカなどの列強との不平等条約の交渉をめぐる国民政府の外交政策を批判していた。租界教育権回収運動とその宣伝において、陳徳徴は教育局長として市

党部と連携して活動を展開し、租界中国人教育問題について外交部や市政府が工部局と交渉するよう求めていた。それによって、工部局は租界中国人教育の改善を余儀なくされたが、陳徳徴の失脚により運動が次第に弱くなり最終的に失敗した。

さらに、国民党政権の統治強化やイデオロギーの強化を目指した宣伝活動としては、思想統制の手段も不可欠であった。上海市党部宣伝部による思想統制は出版物の検閲と映画統制を中心に展開された。上海では国民党に「反動刊行物」と判定された刊行物が最も多く出版され流通していた。市党部宣伝部の編審科は市政府の各部門と連携して「反動刊行物」の取締を実施し、共産主義や帝国主義に関する多くの刊行物を取り締まった。出版物検閲の実施は、国民党に反対する勢力による宣伝の排除や国民党政権統治の強化に役に立っていたといえる。映画統制において上海市党部は中国政権による上海最初の映画審査機関であった戯曲電影審査委員会を設立し、映画審査や映画業者との協力関係の構築に努力していた。しかし、委員会は国民政府側からの支持を欠き、経費不足などの問題が生じたことにより審査工作に大きな困難をもたらし、1929年9月に上海市の電影検査委員会に改組された。電影検査委員会は、戯曲電影審査委員会の活動内容を継承して安定して機能するようになり、2年間に約1000本の国内外映画を審査し、さらに1930年の『不怕死』事件の解決に大きく貢献した。しかし、出版物の検閲と映画審査の共通の特徴として、租界への検閲権の浸透が非常に重要視されていたが、租界側の反発により上海市党部は租界での検閲権の獲得を実現できなかった。

以上の考察から、上海市党部宣伝活動の特徴として以下の5点が指摘できる。第一に、上海市党部は宣伝活動において単に中央宣伝部の指示に従ったのではなく、自主性を十分に発揮していた。第二に、宣伝部長を務めた陳徳徴の宣伝活動に対する影響が看過できなかった。陳徳徴は国民革命時期の反帝国主義や反軍閥の理念に深く影響され、急進的な反帝国主義思想を持っていたため、党外宣伝における反帝国主義宣伝も宣伝活動の重点となった。第三に、上海市党部の宣伝活動は国民党中央の方針と一致しなかった場合が多かった。特に反帝国主義宣伝において、反日運動継続の宣言や修約・廃約問題をめぐる外交部への批判など、中央の政策と大きく乖離した言動が度々あった。第四に、宣伝活動において、区党部・区分部への動員が重要視されていた。宣伝部は市宣伝会議・区宣伝会議の開催や宣伝隊・永久宣伝隊の組織などの手段を通じて、宣伝面における指揮命令システムを構築した。第五に、上海市党部による思想統制において、映画統制がとくに重要視されていた。上海市映画産業の発達などによって、上海市党部は上海市最初の映画審査機関を設立し、それも国民党政権映画統制の端緒となった。

宣伝活動において、最も効果が得られたのは反帝国主義宣伝であった。上海市党部の反日宣伝は反日運動の進行を支え、多くの民衆に日本との経済絶交を納得させ、日本の経済に深刻な打撃を与えた。また、租界教育権回収運動において、宣伝部は教育局と連携して区党部・各社会団体を動員し、大規模な宣伝の展開によって租界当局に譲歩を余儀なくさせた。さらに、『不怕死』事件に対する宣伝は事件の影響力を大きく拡大し、事件の解決に貢献した。これらの事例から見れば、宣伝効果を上げるには、宣伝と行動の一致が極めて重要であったことが分かる。上海市党部の反帝国主義宣伝は実際の反帝国主義運動と同調していたため、宣伝の効果も大きかった。こうした反帝国主義における宣伝と行動の一致は多くの民衆を惹きつけ、国民党の上海での統治と社会基盤の強化に役に立っていたと考えられる。

一方、上海市党部の宣伝工作には問題点も少なくなかった。まず、各区党部の工作報告から見れば、「清党」後における上海市各級党部の再建状況が異なったため、各区の宣伝工作には大きな差が存在した。この影響によって、各区党部管轄区域の国民党宣伝の

効果もそれぞれ異なった可能性が高い。また、前述の上海市党部宣伝活動の特徴の一つとして指摘したように、宣伝内容が中央の政策と乖離した場合があった。こうした中央と地方の不統一は、国民党政権の統治や外交にデメリットをもたらした。さらに、宣伝部は出版物や映画の検閲権を租界内まで拡大しようとしたが、結局のところその目的を達成できなかった。つまり、南京国民政府初期における上海市党部宣伝部の上海市に対する思想統制は不完全なものであったといえよう。

国民党左派・共産党との分離によって、南京国民政府初期における上海市党部の宣伝活動は党部が再建されるに伴い展開され、党組織が十分に整備されていなかったものの、陳徳徴の指導の下に国民党政権の上海での統治基盤の強化に役割を果たした。その役割の発揮は市党部の党・政関係における優位や党権の強さによる党の活性化に関わっていたが、それによる自主性は時々中央の政策との乖離を生じた。上海市党部は反帝国主義宣伝を通じて、共通の外敵への討伐によって民衆の団結と国民党への求心力を強化し、その中で国民政府の統治の基盤を作ろうとした。一方、共産党に反対する宣伝は常に存在していたが、それに関する大規模な宣伝運動がほぼ行われていなかった。要するに、この時期における上海市党部の宣伝活動の標的は共産党より帝国主義にあったのである。しかし、周知のように、反帝国主義運動は決して国民党政権訓政時期のテーマではなく、むしろ列強との関係改善を図り、過激な反対運動を嫌がっていた。そのため、1931年以降における民衆運動の弱体化は、南京国民政府初期に市党部によって構築された上海の統治基礎の弱体化を意味するともいえよう。

しかし、このような中央の政策との乖離は、必ずしもデメリットばかりではなかった。上海市党部が宣伝活動において自主性を発揮したことは、上海における高揚したナショナリズムに同調し、列強に対して強い圧力をかけることにつながった。その結果、租界当局が中国人教育問題の政策改善を余儀なくされたことなど、国民党中央が果たせなかった役割を果たした。この意味では、上海市党部の宣伝活動は上海における国民党統治基盤の強化にとってかけがえのないものであったといえる。これも、地方党部の国民党統治強化における重要性を示している。1930年代以降、中央の政策により国民党地方党部が形骸化したことは、国民党地方統治の弱体化や国民党政権統治基盤の喪失を招いた可能性がある。したがって、今後の国民党研究の課題として、各地域の特殊性を踏まえた国民党各地方党部が発揮した役割や、地方党権の弱体化が国民党政権統治基盤の構築に与えた影響をより深く検討する必要があると考えている。